

覚一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる維盛像

徳田詠美

はじめに

維盛は『平家物語』の中で、妻子を思い続ける貴公子としての印象が強い。特に、出家した維盛一行を見かけた那智籠の僧が安元御賀での青海波の舞を回想する場面（以下、安元御賀回想場面）は、彼が物語中で最も華々しく活躍する箇所であり、維盛を論じる上で重要なものといえる。しかし、安元御賀回想場面を諸本比較し、各諸本における維盛像を考察した先行研究は見当たらなかった。そこで本稿では、まず安元御賀回想場面を七諸本で比較し、その相違点を考える。さらに、維盛の描写に関して他諸本にない表現が覚一本に見られるため、覚一本にのみあるものを「覚一本特有表現」と位置付け、それらが覚一本の維盛像にどんな影響を与え、他諸本とどのように違うのか論じたい。

一 安元御賀回想場面の維盛

—— 諸本比較と覚一本特有表現 ——

まず、各諸本の安元御賀回想場面を見ていく。本稿では語り本から一方流諸本の覚一本と八坂流諸本の屋代本、百二十句本を、読み本から延慶本、長門本、盛衰記、四部合戦状本を取り扱う。なお、引用文中の傍線や太字、記号は引用者による。

〔覚一本〕

あの殿の未四位少将と聞え給ひし安元^Aの春の比、法住寺殿にて、五十御賀のありしに、父小松殿は、内大臣の左大将にてまします。伯父宗盛卿は、大納言の右大将にて、階下^Cに着座せられたり。其外三位中将知盛^B・頭中将重衡以下、一門の人々、けふを晴とときめき給ひて、垣代に立給ひし中より、此三位中将、桜^D

の花をかざして青海波をまうて出られたりしかば、露に媚たる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もか、やくばかり也。²女院より関白殿を御使にて、御衣をかけられしかば、父の大臣座を立是を給はつて、右の肩にかけ、院を押し奉り給ふ。面目たぐひすくなうぞ見えし。かたへの殿上人、いかばかりうら山しう思はれけむ。³内裏の女房達の中には、「深山木のなかの桜梅とこそおぼゆれ」など言はれ給ひし人ぞかし。^E唯今大臣の大將待かけ給へる人とこそ見奉りしに、けふはかくやつればはて給へる御ありさま、かねては思ひもよらざしをや。うつればかはる世のならひとは言ひながら、哀なる御事哉

(卷第十「熊野参詣」)

〔屋代本〕

安元ノ御賀ニ其比十八カ・九カニテ・桜ヲ・カサヒテ・青海波ヲ被舞シニ・当家ニモ・他家ニモ・兒ヨキ殿上人ト・撰垣代ニ立給ヘリ・階下ニハ・関白以下ノ大臣公卿多ク着給タル中ニモ・父ノ小松殿ノ・大將ニテ被着タリシニハ・又人可立並トモ・見サリシ物ヲ・嵐ニ匂フ・花ノタクヒニ・風ニ翻ル舞ノ袖・照一天ヲ耀地程ナリ・アハヤ・大臣大將只今待懸給ヘル人ヨ・トコソ我モ人モ申シニ・移レハ替ル世ノ習コソ悲ケレ

(卷第十「惟盛高野登山并熊野参詣同人水事」)

寛一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる惟盛像

〔百二十句本〕

安元ノ御賀ニ、そのころ十八か九かにて、桜をかざいて青海波を舞はれしに、^C当家にも他家にも、みめよき殿上人にえらばれて垣代にたち給へり。橋もとは関白以下ノ大臣、公卿、おほく着き給ひしなかにも、^G父の大將にて着せられたりしかば、人また並ぶべしとも見えざつしものを。¹嵐にほふ花のすがた、風にひるがへる舞の袖、天を照らし地を輝かすほどなりき。「あはや、^E大臣の大將を待ちかけ給へる人」とこそ、われも、人も、申せしに、移れば変る世のならひこそかなしけれ

(第九十八句「惟盛入水」)

〔延慶本〕

アノ殿四位ノ少將ト聞ヘ給シ安元二年ノ春比、法皇法住寺殿ニテ五十ノ御賀ノ有シ時、父ノ大臣ハ内大臣ノ左大將ニテ左ノ座ニ着座、伯父宗盛ノ右大將ハ右ノ着座セラレキ。其時ハ、越前三位通盛卿ハ頭ノ中将、本三位中将重衡卿ハ藏人頭、此人々ヲ始トシテ、^C一門ノ卿相雲客、今日ヲ晴ト声「花ニ引修ヒテ、青海波ノ垣代ニ立給ヘリシ中ヨリ、アノ殿青海波ヲ舞出ラレタリシ有様、¹嵐ニタグフ花ノ匂ヒ、天モ耀ク計ナリシ事ノ、只今ノ様ニ覚ユルトヨ。『今阿三年ノ内ニ大臣ノ大將ニ疑アラジ』ト申アヘリシニ、カク見成奉ルベシトハ思ヤハ寄りシ。遷レバ易

ル代ノ習ト云ナガラ、穴哀ノ御有様ヤ

(第五末「那智籠ノ山臥惟盛ヲ見知奉事」)

〔長門本〕

あの殿の四位少将と申し時、^A安元の春の頃、^A法皇^A法住寺殿にて、
報恩経供養の時、五十の御賀の有しに、父重盛は内大臣の左大
将、叔父宗盛卿は中納言右大将にて、階下に着座せられたりき、
頭中将通盛^B、三位中将重衡卿以下の卿相うんかく十余人、はな
やかなる姿にて引つくるひて、垣代にたれたりし中より、^D桜
梅を折かざして、青海波を舞て出られたりし景氣は、たとへば
¹嵐にたくふ花の匂ひ御身にあまり、風にひるがへる袂天にかゝ
やき、地をてらすばかりなりし、御有様の今の様におほゆるぞ
や、^E今阿三年もあらば、大臣の大将疑ひあらじとこそ見奉りし
に、今かく見なし奉るべしとは、かつて思はざりし事かな、う
つればかはる世の習といひながら、むざんのありさま哉

(卷第十七「維盛高野参詣同投身事」)

〔盛衰記〕

^A安元二年の春の頃、^A法皇^A法住寺殿にて五十の御賀のありしに、
^D時の綺羅を付けて青海波の曲を舞ひ給ひしに、^H前には月卿玉の
冠を研きて十二人、後には雲客花の袂を連ねて十五人、その中
に父の大臣は内大臣左大将、叔父宗盛は中納言右大将、^B知盛は

三位中将、重衡は藏人頭中宮亮、已下^C一門の月卿雲客今日を晴
ときらめきて、皆花やかなる貌にて舞台の垣代に立ち給ひたり
し時はさしもうつくしくおはせしが、中にもこの時は四位の少
将にて舞ひ給ひたりしかば、¹嵐に類ふ花の色、匂ひを招く舞の
袖、天を照らし、地も耀く程に見えしかば¹簾中・簾外皆さざめ
き立ちて、桜梅の少将とこそ申ししか。哀れにうつくしく見え
給ふ人かな。^E今三四年が程に、大臣の大将は疑ひあらじものを
と、諸人に言はれ給ひしぞかし。^Jされども龍樹菩薩の釈に曰く、
『世間は車輪の如し、時に変じて輪転に似たり』文、げに只今
の有様に引き替へておはしぬるを見れば、朝の紅顔、夕の白骨、
理なりと思ひ合せて泣かるるなり

(卷第四十「維盛入道熊野参詣附熊野・大峰の事」)

〔四部合戦状本〕

此の殿、四位の少将にて御せし時、^A安元元年三月、^A法皇^A仁和寺
にて臨時の御経供養并びに五十の御賀有りに、^G父の大臣殿は、
公卿の中に勝れて見えたまひて、舍弟宗盛卿は左衛門督にて御
せしが、歌釈に立ちたまひし^C一門の人々、今日を晴と威儀たま
ひしに、此の殿、左衛門の陣より^D桜を^D疣差して、青海波を舞は
れたりしかば、¹御身に余る匂伝はり、嵐廻り絶え、袖の色風に
翻る。^H前に臨めば、月卿冠を並べて十二人、後ろを顧みれば、

雲客袖を連ねて十五人。垣代に立ちて咄かりし事ぞかし

(巻第十「維盛熊野参詣」)

七諸本の引用から、おおよそ十三の相違点が指摘できる。引用の記号と対応する形で以下にまとめる。

A 延慶本、盛衰記には「安元二年ノ春比」、「法住寺殿」とあるが、四部合戦状本は「安元元年三月」、「仁和寺」とする。『玉葉』によると、事実としては前者が正しい^①。なお、それ以外の諸本には具体的な年が書かれていない。

B 覚一本、盛衰記が「知盛」と記している箇所を、延慶本や長門本は「通盛」とする。「通盛」を採るのが古態とされる諸本であることから、覚一本と盛衰記が「知盛」に改変したものと推察できる。

C 垣代に立つ人々に関して、八坂流諸本は「当家にも他家にも」とする。一方、長門本以外の他諸本は「一門」と記して平家一門に限定している。

D 維盛の姿に関して、盛衰記には「時の綺羅を付けて」と書かれている。しかし、延慶本には記述がない。また、それ以外の諸本は桜などの花をかざしていると示す。

1 覚一本が「露に媚たる花の御姿」と記す一方、他諸本は「風にはふ花のすがた(百二十句本)」などと表現する。

覚一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる維盛像

2 覚一本にのみ見られる。

3 覚一本にのみ見られる。

E 語り本の諸本は、用字の違いがあるものの「大臣の大将待ちかけ給へる人(覚一本)」のように表現するが、延慶本、長門本、盛衰記は「今両三年ノ内二大臣ノ大将ニ疑アラジ(延慶本)」と描く。ただし、両者の内容に大きな違いはない。

F 維盛が当時十八、九歳だったと記すのは、八坂流諸本のみである。

G 八坂流諸本と四部合戦状本は、重盛を卓越した存在として描く。

H 盛衰記、四部合戦状本は、垣代に立つ公達を前列と後列の対句で表現する。

I 盛衰記のみ「桜梅の少将」と示す。

J 盛衰記にのみ、この表現が見られる。

右の一覧を見ると、1、2、3以外では、八坂流諸本による重盛の描写と盛衰記による独特の表現が目立つ。前者について、八坂流諸本はCで平家だけでなく他家の存在も書き、Gによって誰よりも秀でた存在として重盛を置く。すなわち、八坂流諸本は青海波を舞う維盛だけではなく、父重盛も安元御賀の中心人物として描いている。八坂流諸本に重盛と維盛しか平家一門の人物名が出ない点も考慮すると、八坂流諸本には重盛を筆頭とした小松家を際立たせる意図が

あると考えられる。一方、八坂流諸本以外は重盛だけを書くのではなく宗盛、重衡なども書き連ね、あくまで平家一門を示す。ただし四部合戦状態の記述だけは、重盛の秀逸さと平家一門の全盛を両立させているといえよう。また、後者について、盛衰記には他諸本にない表現が三つ見られる（D、I、J）。よって、盛衰記は他諸本と比べて独自性の高い本文をもつことが分かる。

盛衰記と同様に、安元御賀回想場面において他諸本にない表現を三つもつのが、覚一本である。覚一本に特有の表現は、先述の一覽で1、2、3と記したものだ。

2、3は対応する表現が他諸本に見受けられない。また、1は他諸本の「嵐」、「匂」を用いた表現に対応すると考えられる。どちらにしても覚一本にしか見られない表現という意味で、本稿では「覚一本特有表現」と位置付ける。さらに、この三点は維盛の舞姿やそれをきっかけとした場面の描写である。ゆえに、安元御賀回想場面の覚一本特有表現は全て維盛像に関わるものといえる。そのような表現であればこそ、覚一本からは他諸本と異なる維盛像が発見できると考えられるのである。

二 覚一本の維盛像に見られる特徴（1）

——先行研究から——

前節では安元御賀回想場面を諸本比較し、覚一本特有表現が三つあることを述べた。本節からは、各々の覚一本特有表現をひも解き、覚一本の維盛像が他諸本とどのように異なるのか探りたい。まず本節では、先行研究において他作品との関連を指摘されている2と3を取り上げる。

二—一 群書類従本『安元御賀記』と覚一本特有表現

2については、群書類従本（以下、類従本）『安元御賀記』との関連が指摘されてきた。

（前略）左の舞人にはやうとす、むれば。しばし有て権のすけ少将これもり出て落尊入綾をまふ。（中略）舞終りて帰り入時。院の御まへより殿上人を御使にてめてしけふの舞のおもてはさらにく是にたくふ有まじくみえつるをとて。女院の織物のかず。御ぞに紅の御袴ぐして。関白御使えたまはするに。父の大將座を立て参りて。御衣を取て右のかたにかけて。院を押し奉り給程のめいばく。其時に取てはたくひなくぞ見えし。かたへの人々もいかにうらやましよう覚えけん。²⁾

右の場面と2は、舞の曲名が異なるものの場面展開が共通する。また、「女院」、「閨白」の呼称はもちろん、「右のかたにかけ」、「院を押し奉り給」、「うらやましう」などの表現にも共通の語を含む。加えて、2が『平家物語』諸本の中で覚一本に特有であることも、すでに富倉徳次郎氏によって指摘されている^③。氏はさらに、『平家物語』、『安元御賀記』の諸本は各々に安元御賀での維盛を描いていたが、『平家物語』が後に類従本『安元御賀記』に基づき同場面を書き改めた可能性がある^④と論じる。この「書き改めた」部分こそ2であるろう。

しかし、覚一本と類従本『安元御賀記』の成立順序によっては、類従本『安元御賀記』が2を下敷きとして表現を書き改めたとも考えられる。この点について、以下伊井春樹氏の説を取り上げて整理しておきたい。氏は『玉葉』との対照から、定家本『安元御賀記』—類従本『安元御賀記』—『平家公達草紙』青海波の段という順で成立したことを明らかにし、覚一本の安元御賀回想場面に出る知盛、重衡の官職に関して、「(前略)知盛の三位中将と重衡の頭中将は『平家公達草紙』と一致する。とりわけ重衡については(中略)『平家公達草紙』の改定にともなう特有の官職で、それが『平家物語』と重なるというのは、共通する資料があったためか、『平家公達草紙』を参考にした結果とも考えられそうである。」と記す。『平家公

覚一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる維盛像

達草紙』青海波の段は類従本『安元御賀記』に依拠するとされ、南北朝期頃に写された第一種本に収められている^⑤。覚一本は応安四年(一二七二)の奥書をもつため、両者は同時期のものだと考えられよう。また、『平家公達草紙』青海波の段には2のような表現は見られないが、前節の諸本比較を見ると重衡を頭中将とするのは覚一本のみだ。これらの点から、類従本『安元御賀記』は覚一本が2を取り入れる以前に成立し、覚一本の安元御賀回想場面は類従本『安元御賀記』、『平家公達草紙』青海波の段やそれらと共通の資料を用いて当該場面を書き改め、現在の状態になったと推察する。

したがって、2は類従本『安元御賀記』と同様の資料、または類従本自体を下敷きにした表現といえる。以上、富倉氏、伊井氏の説を支持し、2について考察した。

二二 『源氏物語』と覚一本特有表現

3については、『源氏物語』紅葉賀巻との関わりが指摘されている。具体的には、光源氏と頭中将が青海波を舞った際の、

片手には大殿のとふの中将、かたち用意人にはことなるを、立ち並びては、なを花のかたはらの深山水なり^⑥。

を踏まえて「深山水」と「桜梅(花)」を組み込み、維盛を光源氏に擬したとされる。また、維盛を光源氏と重ねる例は類従本『安元

御賀記』や『建礼門院右京大夫集』にも見られる。

片手は源氏の頭の中將ばかりだになければ。(後略)

(類従本『安元御賀記』)

法住寺殿の御賀に、青海波舞ひての折などは、「光源氏の例も思ひ出でらるる」などこそ、人々言ひしか。

(『建礼門院右京大夫集』)

3が「深山木」と「桜梅」による比喩であったのに対して、右の二例は「光源氏」と明記する。一方で、他諸本の安元御賀回想場面には『源氏物語』紅葉賀巻や光源氏を明らかに取り入れたと見受けられる表現はない。よって、3の描写は他諸本よりも類従本『安元御賀記』や『建礼門院右京大夫集』のそれに近いといえる。3は貴族的な美の代表である光源氏を維盛に投影し、維盛の美しさを女房の視点から描写したものだと考えられる。

以上の考察から、2と3は他者が維盛の青海波を高く評価したことを記し、維盛と光源氏を重ねることで彼の貴族としての活躍を強く印象付けているといえる。そしてそれが、安元御賀回想場面における覚一本と他諸本の差異ではないだろうか。

三 覚一本の維盛像に見られる特徴(2)

——「媚」の語から——

前節では2、3に見られる維盛像を探った。本節では1について考える。1に関しては2や3とは異なり、注目すべき先行研究が見当たらない。本節では、『平家物語』諸本や他の先行作品から「媚」の用例を集め、1が描く維盛の姿に迫る。なお、覚一本の奥書を考慮し、応安四年(一二七二)以前の作品を採る。

三—一 覚一本「露に媚たる」と他諸本「嵐にほふ」の比較

まず、第一節で1に対応すると推察した「嵐」、「匂」を含む表現と1を比較したい。ここでは他諸本の表現について、1との対応が語単位で表れる「嵐にほふ花のすがた(百二十句本)」に統一して示す。

三—一 a 「嵐にほふ花のすがた」と和歌

比較対象の「嵐にほふ花のすがた」は、和歌によく使われる表現である。

『新編国歌大観』によると、「嵐」、「匂」が同時に出てくる和歌は四十四例あり、その中で花やそれに準じる語を含むものは四十一例

(全体の九十%以上)であった。

山たかみつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞちりける
〔古今和歌集〕四四六番歌、紀利貞

山桜さそふ嵐のかよひきて匂ひもまがふ峰の白雲

〔玄玉和歌集〕五四五番歌、円経法師

さとわかぬ月をばいろにまがへつつよものあらしにほふ梅がえ
〔千五百番歌合〕一八八番歌、藤原定家

以上のように、「嵐」、「匂」が出てくる例はほぼ全てが「花」、「梅」、「桜」なども詠み込む。また、「嵐にほふ」の例を検索すると、右の『千五百番歌合』一八八番歌が初出で、応安四年(一二七二)までの他の例としては、『住吉社歌合弘長三年』二番歌と『続門葉和歌集』七〇番歌が確認できた。それ以後の例は寛文九年(一六六九)成立の『黄葉和歌集』一三九一番歌のみであった。用例の少なさや、初出が定家の作という点を考えると、「嵐にほふ花」は和歌の中でも『千五百番歌合』一八八番歌を参考にした可能性があるう。

これまでの用例から、覚一本以外の他諸本に見られる「嵐にほふ花のすがた」等の表現は、右に示したような和歌に詠まれる風景と共通するといえる。他諸本は和歌的な表現によって、維盛の舞姿の美しさを描いたと考えられよう。

覚一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる維盛像

三一 b 「露に媚たる花の御姿」と漢詩文

前項の「嵐にほふ花のすがた」に対して、1の「露に媚たる花の御姿」は和歌に見られる表現とはいえない。

『新編国歌大観』で検索すると、「露」と「媚(嬌)」が同時に出現する例は和歌には見られなかったが、次のような漢詩文を確認した。なお、『平他字類抄』や『色葉字類抄』において、「嬌」も「こびたり」と読んでいるため、「嬌」の用例も同様に考察する。

昨は園の露を含みて玉顔媚たり 今は籬の霜を戴きて白髮新たなり
〔和漢兼作集〕九七一番歌、平範雅

柳絮風に払ふ頭上の雪 桃顔露に嬌ぶ鏡中の春

〔和漢兼作集〕二六三番歌、藤原経任

風に随ひて春に舞ふ未央の柳 露を帯びて夕に嬌ぶ大液の蓮

〔朗詠題詩歌〕三九三番歌、尊円

この三例を比較すると、『和漢兼作集』の二例が顔に対して「露」、「媚(嬌)」を用いる点で共通し、1にやや近い。しかし、1は維盛の顔だけでなく容姿全体を描写する表現であるため、『和漢兼作集』の二例と全く同じ用い方とはいえない。

続いて「媚(嬌)」だけの例を考察し、「媚(嬌)」の使われ方がどんな特徴を有しているか、日本や中国の漢詩文、散文から探る。

ここで中国の文学作品も調査対象とするのは、日本の漢詩文、散文

の用例に中国の文学作品を摘句、下敷きとした表現が見られたからである。^⑩

『漢詩大観』^⑪、その他の索引類から管見に入った「媚（嬌）」は、百例であった。これらの用例を見ると二点の指摘ができる。第一に「媚（嬌）」の語が春やそれにもつわる事物に関して用いられる点、第二に「媚（嬌）」が女性や子どもに対して用いられる点だ。

「媚（嬌）」の語を用いた春の漢詩文や散文は、三十一例（全体の三十一%）であった。

抄春の余日媚景麗しく、初巳の和風払ひて自ら軽し。^⑫

（『万葉集』三九九九番）

嬌びたる眼は波を曾ねて風を乱れむとす 舞へる身は雪を廻して霽れてもなほし飛べり^⑬

（『菅家文章』巻第二、早春の内宴に、仁寿殿に侍りて、同じく「春娃氣力なし」といふことを賦す、製に応へまつる一首）

『万葉集』の例は、晩春の景色について「媚景」と表現する。「麗しく」の語から、「媚景」に春の華やかさが読み取れる。一方、『菅家文章』巻第二の例は、内宴の舞姫たちに対して「嬌」の語が用いられている。これは春と「嬌」が直接結びつくものではないが、題詞に「早春の内宴」とあるため、「媚（嬌）」を使った春の漢詩文といえよう。また、先に挙げた『和漢兼作集』二六三番歌には「桃顔露

に嬌ぶ鏡中の春」と記されており、右のような例と同じく「媚（嬌）」と「春」をともに詠む。さらに、春に関連する事物と「媚（嬌）」をともに詠み込む用例も見られる。

粉閣に夢驚いて好晝を伝へ 紅窓に灯尽きて嬌音を送る

（『新撰朗詠集』五九番歌、宮鶯曙光に囀る、村上天皇）

夜の雨儼かに湿して 曾波の眼新たに嬌び 暁の風緩く吹いて

不言の口先づ咲む^⑭

（『和漢朗詠集』四三番歌、桃始めて華さくの詩の序、紀長谷雄）

『新撰朗詠集』の例は鶯の鳴き声を「嬌音」と表現する。この他にも、『宮河歌合』七、八番歌の判詞に鶯の声を「嬌音」と記した用例がある。また、『和漢朗詠集』の例は同じく春の事物である桃の様子を美女の仕草に喩え、「嬌」の語を用いる。この他には、『和漢兼作集』一六一番歌も桃に「媚」の語を使う例であった。鶯、桃はどちらも春の題材なので、これらも「媚（嬌）」の語を用いた春の漢詩文だといえる。以上のような、春やそれにもつわる事物の例からは、維盛が青海波を舞う際に桜の花をかざしたことが想起される。1は、春の代名詞たる桜をかざして舞う維盛を、春の華やかさと結び付けて描写した表現であると考えられよう。

次に、「媚（嬌）」が女性や子どもに対して使われる用例は二十例（全体の二十%）である。

〔前略〕傾城今始めて見る 傾国昔曾て聞けり 媚眼羞に随いて合し〔後略〕^⑤

〔玉台新詠〕卷六、南苑にて美人に逢う、何思澄

〔前略〕是傾城可憐の女を須つ。呉妖の小玉飛びて煙と作り、越艶西施化して土と為る。嬌花巧笑久しく寂寥、〔後略〕^⑥

〔白楽天詩後集〕卷一、霓裳羽衣舞歌

〔前略〕嬌女、字は平陽、〔後略〕^⑦

〔李太白詩集〕卷十二、東魯の二稚子に寄す、金陵に在りて作る〔後略〕^⑧

衰病四十の身、嬌癡三歳の女。〔後略〕^⑧

〔白楽天詩集〕卷十、金鬢子を念ふ 二首

前二例が女性に対して、後二例は子どもに対して「媚（嬌）」を用いたものである。『玉台新詠』と『白楽天詩後集』の例は美女に「媚（嬌）」の語を用いるため、美しさも「媚（嬌）」の意味するものと関連することがうかがえる。また、『李太白詩集』と『白楽天詩集』の例は、作者の李白や白居易が我が子を思つて詠んだ漢詩文である。我が子に対して「嬌」の語を使う点から、「媚（嬌）」は愛らしさにつながる表現だと考えられる。

以上、「嵐にはふ花のすがた」と1の「露に媚たる花の御姿」を考察し、前者が和歌、後者が漢詩文に見られる表現であることを

覚一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる維盛像

確認した。さらに、漢詩文に出てくる「媚（嬌）」の表現の傾向から、1は維盛を春の華やかさや女性的な美の中で描写したものと考えられる。特に、女性に多く使われる表現を用いて維盛という男性を描写した点は、覚一本の安元御賀回想場面における維盛像が他諸本と異なる部分だといえよう。

維盛以外に「媚」を用いて描かれた男性として、『今昔物語集』における藤原伊衡が挙げられる。

〔前略〕極く哀二思へテ、居タリツル茵ニ移リ香媚ナバ、取除ケ疎シ。^⑨

〔今昔物語集〕卷第二十四「延喜御屏風伊勢御息所、読和歌語第三十一」

右の例は、伊衡が醍醐天皇の遣いとして伊勢御息所の元へ訪れた際、伊衡退出後に女房たちが伊衡の薫物の香りを取り除けがたく感じる場面である。これを見ると、維盛と伊衡に使われた「媚」は舞姿や薫物の香りといった貴族性を示すものに対して用いられる点が一致する。1には、女性的な美の表現「媚」によって維盛の貴族性を表現する意図があったのではないだろうか。さらに、薫物の香りを「媚」と表現された伊衡に対し、維盛の場合は彼自身の姿に「媚」の語が使われる。両者を比べると、伊衡の「媚」は間接的、維盛のそれは直接的に各々の人物像を表現すると考えられる。「媚」の語

がもつ女性的な美や貴族性は、維盛本人の人物像に深く関わりと見えるだろう。

三十二 覚一本に出てくる「媚」の傾向——他諸本との比較

前項では先行の文学作品から1が描く維盛像を考察した。本項では、覚一本に見られる「媚」の例を確認し、他諸本と比較した上で、覚一本の安元御賀回想場面における維盛像を考えたい。

覚一本に出てくる「媚」の用例は、1を含め以下の五例であった。ア この后、一たびめめば百の媚ありけり。

(巻第二「烽火之沙汰」)

イ 一たびめめば百の媚ありけん漢の李夫人の、(後略)

(巻第三「赦文」)

ウ (前略) 万乗の聖主、猶緬転の媚をなし、(後略)

(巻第四「南都牒状」)

エ 北の方と申は、(中略) 桃顔露にほころび、紅粉眼に媚をなし、柳髪風にみだる、よそほひ、又人あるべしとも見え給はず。

(巻第七「維盛都落」)

オ (前略) 露に媚たる花の御姿、風に翻る舞の袖、(後略)

(巻第十「熊野参詣」)

他諸本との比較は稿末の表にまとめた。それによると、ア、イ、ウは覚一本以外の諸本にも見られ、エとオは覚一本にのみ「媚(嬌)」の語がある。

他諸本にも用例があるものは、身分の高い人物に対して「媚(嬌)」を用いる点が共通する。具体的には、アとイは「長恨歌」の「眸を回らして一笑すれば百媚生じ」を下敷きにしており、后であった褒姒、李夫人に対する描写である。また、ウは天皇や上皇に対する表現だ。これを前項での検討とあわせて考えると、ア、イ、ウは漢詩文に見られる「媚(嬌)」の表現を通し、対象人物の高貴さを高めているといえるだろう。ここからも、「媚(嬌)」という女性的な表現が貴族性を含むことがわかる。

一方、覚一本にしか用例がないものは、維盛の北の方の美貌を記すエと、本稿全体で1として取り上げているオである。ここでエに注目したい。延慶本、盛衰記もエと同様に北の方の美貌を描くが、「媚」の語で北の方を描写したのは覚一本だけである。すなわち、覚一本にのみ見られる「媚」は維盛夫妻に対するものだといえる。覚一本は維盛、北の方の人物像を「媚」の語によつて方向付けようとしたのではないか。前項の考察やア、イ、ウの共通点をエ、オに当てはめると、覚一本の維盛や北の方は「媚」の語が用いられることで、彼らの女性的な美や貴族性が強調されているといえよう。ま

た、エは先述の『和漢兼作集』二六三番歌と「桃顔」、「媚（嬌）」、「柳」、「風」の語が一致する。現在のところ、両者にそれ以上の関連は見出せないが、注意しておきたい。

以上、『平家物語』諸本の「媚」から、1も2、3と同様に維盛の貴公子ぶりを示すといえる。さらに、覚一本にのみ見られた「媚」の例が維盛夫妻に対するものであった点に留意すると、覚一本は「媚」の語で維盛夫妻の美しさや貴族性を強調したと考えられるのである。

おわりに

安元御賀回想場面の諸本比較から、三つの覚一本特有表現が指摘できた。それらがどのような維盛像を作り上げているか、また、他諸本の表現とどのように異なるのか考察した結果、次のような結論に至った。まず1は、漢詩文に見られる表現を用い、維盛の女性的な華やかさや美しさ、貴族性を示した点が他諸本と異なると考えられる。続いて2は、先行作品ならびに同時期の作品やそれらと共通の資料を参考にし、維盛の舞姿が誉れ高いものであったことを描いた。これも1と同じく、維盛の貴族性を表現したといえる。そして3は、『源氏物語』紅葉賀巻を連想させる「深山木のなかの桜梅」という表現を用い、維盛に光源氏の姿を強く投影させた点が他諸本

との違いであろう。

以上のように、覚一本特有表現は結局、安元御賀回想場面で各諸本が主題とする維盛や平家一門の栄華、貴族的成功を描いたものだといえる。しかし、これらの表現によって覚一本の当該場面に独自性が生まれたのも事実であろう。例えば1の表現から、維盛夫妻には他の登場人物と異なる貴族性を見出すことができ、2や3の表現は、維盛が青海波の舞を他者から高く評価されたことを記して、彼の活躍を際立たせている。

さらに、これらの独自性は、その後の維盛譚をさらに悲劇的に見せるものとして効果的に働いていると思われる。安元御賀回想場面の後、物語は維盛入水へと進む。維盛ほどの諸本でも妻子を忘れられない貴公子として終わる。その展開を踏まえると、若くして入水する維盛が活躍した過去の一場面こそ、安元御賀回想場面なのだ。在りし日の姿が輝かしいほど、入水という悲愴な末路が浮き彫りになる。覚一本は特有表現によって維盛の貴族性や過去の栄華を強調し、後に語られる入水を一層悲劇的に見せようとしたのだろう。

覚一本の安元御賀回想場面において特有表現が維盛譚を劇的にするための工夫であったと考えるならば、他の場面からも同様の意図をもつ覚一本特有表現が見つかるのではないか。これを今後の課題としたい。現時点では、都落ちに際して維盛が北の方に言った

たとひわれ討たれたりと聞たまふ共、さまざまなどかへ給ふ事は、ゆめく有べからず。
(巻第七「維盛都落」)

が、本稿で取り上げた諸本の中で覚一本にのみ見られることを確認している。この表現は次の引用箇所との関連から、巧みに構成されたものであったと考えられる。

若君の御めのとの女房、泣く／＼申けるは、「(中略)今はいかなる岩木のはざまにても、おさなき人々をおほしたてまいらせんと、思召せ」と、やうく／＼になぐさめ申けれ共、(中略)やがてさまをかへ、かたのごとくの仏事をいとなみ、後世をぞとぶらひ給ひける。
(巻第十「三日平氏」)

右の引用は、維盛が亡くなったことを知り悲しむ北の方に、六代の乳母が子どもたちの養育に励むよう諭した場面、および北の方のその後が書かれた場面である。本稿で取り上げた七諸本において、乳母が北の方に子どもたちの養育を説くものは覚一本の他にも延慶本、長門本、盛衰記、四部合戦状本がある。しかしそのうち、北の方が出家したと明言するのは覚一本のみだ。^②北の方が出家するという覚一本の物語展開を踏まえると、「維盛都落」で維盛が北の方に出家を禁じたことは、「三日平氏」への伏線として組み込まれているといえる。この伏線も、本稿で述べた覚一本特有表現のように、維盛やその周囲の物語を劇的に演出する工夫だと考えられよう。

注

『平家物語』本文引用は、覚一本が梶原正昭・山下宏明校注『新日本古典文学大系 平家物語 上・下』(岩波書店、一九九一～三年)、屋代本が佐藤謙三・春田宜編『屋代本平家物語 上・下巻』(桜楓社、一九七三年)、百二十句本が水原一校注『新潮日本古典集成 平家物語 上・下』(新潮社、一九七九～八一年)、延慶本が北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇 上・下』(勉誠社、一九九〇年)、長門本が国書刊行会編『平家物語 長門本』(名著刊行会、一九七四年)、盛衰記が水原一考定『新定源平盛衰記 第一～五巻』(新人物往来社、一九八八～九一年)、四部合戦状本が高山利弘編著『訓読四部合戦状本平家物語』(有精堂出版、一九九五年)による。

① 詩歌の引用は、特に注記を付さない場合『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver. 2』(角川書店、二〇〇二年)による。また、歌番号は注記の有無にかかわらず『新編国歌大観』に従った。
なお、引用に際しては適宜字体や訓読表記を改めた。

② 『玉葉』安元二年三月四日条。

③ 塙保己一編纂『群書類従 第二十九輯』統群書類従完成会、一九八二年)による。類従本『安元御賀記』の引用は、以下同じ。
④ 富倉徳次郎注釈『平家物語全注釈 下巻(一)』(角川書店、一九六七年)。

⑤ 伊井春樹『安元御賀記』の成立―定家本から類従本・『平家物語草紙』へ―(『国語国文』第六一号第一巻、一九九二年一月)による。

⑥ 『平家公達草紙』に関しては、③や④の他に、馬場淳子『平家公達草紙』の維盛像(小峯和明編『平家物語』の転生と再生』笠間書院、二〇〇三年)、重政誠『平家公達草紙』『青海波』成立に関する小考』(『学殖院大学日本語日本文学』創刊号、二〇〇五年三月)を参照した。

- ⑥ 柳井滋ほか校注『新日本古典文学大系 源氏物語 一』(岩波書店、一九九三年)による。
- ⑦ 主な先行研究は以下の通り。壬生由美「『平家物語』における平維盛像の形成」『源氏物語』との関係めぐって」(『国文』第七三号、一九九〇年七月、高木信「維盛としての光源氏」(室伏信助監修・上原作和編『人物で読む『源氏物語』 第三卷 光源氏Ⅲ 勉誠出版、二〇〇五年)、三田村雅子「記憶」の中の源氏物語(8) 安元御賀の「花の姿」(『新潮』第一〇二巻第二号、二〇〇五年二月)。
- ⑧ 久保田淳校注・訳『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(小学館、一九九九年)による。
- ⑨ 木村成編『平他字類抄 本文と索引』(笠間書院、一九九一年)や中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに総合索引 黒川本・影印篇』(風間書房、一九七七年)を参照した。
- ⑩ 『新撰朗詠集』七三二番歌や『千五百番歌合』二六七五番歌判詞に、『遊仙窟』の「誰か知らん憎む可き病鶴、半夜人を驚かし、薄媚の狂雞、三更に暁を唱ふを。」の摘句がある。また、『秋夜長物語』や『平治物語』下「常葉六波羅に参る事」は本論で述べた『長恨歌』の一節を下敷きとした表現が見られる。
- ⑪ 佐久節編『漢詩大観 上』下巻・索引第2」(関書院、一九三六〜九年)。
- ⑫ 佐竹昭広ほか校注『新日本古典文学大系 万葉集 四』(岩波書店、二〇〇三年)による。
- ⑬ 川口久雄校注『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』(岩波書店、一九六六年)による。
- ⑭ 菅野禮行校注・訳『新編日本古典文学全集 和漢朗詠集』(小学館、一九九九年)による。
- ⑮ 石川忠久訳『中国の古典 玉台新詠』(学智研究社、一九八六年)による。
- ⑯ 佐久節訳注『統国訳漢文大成 白樂天全詩集 第二卷』(日本図書センター、一九七八年)による。
- ⑰ 久保天随注解『統国訳漢文大成 李白全詩集 第二卷』(日本図書センター、一九七八年)による。
- ⑱ 佐久節訳注『統国訳漢文大成 白樂天全詩集 第三卷』(日本図書センター、一九七八年)による。
- ⑲ 小峯和明校注『新日本古典文学大系 今昔物語集 四』(岩波書店、一九九四年)による。
- ⑳ ⑯に同じ。
- ㉑ 他諸本は、長門本の巻第十七「三日平氏事」に見られる「(前略)さまをもかへ、身をも投給ふべくぞみえ給ふもむざんなり」のような描写に留めている。

	ア	イ	ウ	エ	オ
屋代本	一度咲ハ・百媚アリ(巻第二)「重盛卿父禪門諷諫事」	一咲ハ・百媚有ケル(巻第三)「鬼海島流人小将成経并康頼法師赦免事」	欠本	×(「平家一門落都趣西国事」)	×(巻第十「惟盛高野登山并熊野参詣同入水事」)
百二十句本	一たび笑めば、百の媚あり(巻第二)「大教訓」	ひとたび笑めば百の媚ありけん(巻第三)「大赦」	なほ面詔の媚をなす(巻第四)「牒状」	×(巻第七「平家一門都落ち」)	×(第九十八句「維盛入水」)
延慶本	×(第一末「重盛軍兵被集付周幽王事」)	×(第二本「建礼門院御懐妊事付成経等赦免事」)	尚成面展之嬌(第二中「三井寺ヨリ山門南都へ牒状送事」)	×(第三末「惟盛北方事」)	×(第五末「那智籠ノ山臥惟盛ヲ見知奉事」)
長門本	×(巻第三「幽王被討事」)	×(巻第五「建礼門院御懐妊事」)	猶成面展媚(巻第八「山門南都牒状事」)	×(巻第十四「平家都落給事」)	×(巻第十七「維盛高野参詣同投身事」)
盛衰記	笑み給ひたりければ、いとど百の媚をぞ増し給ふ(巻第六「幽王褒姒烽火の事」)	×(巻第九「中宮御懐妊附宰相丹波少将を申し預る並康頼熊野詣で祝詞の事」)	尚面展の媚を成し(巻第十四「興福寺返牒の事」)	×(巻第三十一「維盛妻子に遣を惜しむ事」)	×(巻第四十「維盛入道熊野参詣附熊野・大峰の事」)
四部合戦状本	欠本	×(巻第三「成経赦免」)	×(巻第四「南都牒状」)	×(巻第七「維盛北方の事」)	×(巻第十「維盛熊野参詣」)

× 対応部分に「媚(嬌)」の含まれる表現が見当たらない場合